

小説から見えてくる現代

― 近年の芥川賞作品より ―

—

芥川賞の多くの小説は、現代の動向を敏感に反映していると言える。たとえば、格差や貧困の問題が論壇等で話題になり始め、一般の人たちも格差問題にはつきりと気づき始めた頃、二〇〇八年度下半期の芥川賞は、大卒で契約社員の二九歳の女性を主人公にして、彼女のプレカリアート（非正規雇用者など不安定労働者）ぶりが描かれた、津村記久子の『ボトスライムの舟』（『群像』、二〇〇八・一一）が受賞した。格差社会の問題や、その問題と大いに関連のある、日本の子ども六人に一人が貧困であるという貧困社会の問題は、一向に軽減することなく、むしろ逆に拡大の様相さえ見せながら、今日も続いているのだが、昨今の幾つかの芥川賞作品から窺われるのは、現代人にとっては〈私〉というものの輪郭が以前のようにはつきりとはしなくなった、という問題である。

綾 目 広 治

以前ならばその種の問題は、セルフ・アイデンティティ（自己同一性）の危機というふうに言われることがあったが、現代はその危機の中にある当人がそれを危機として感じない状態になっているのである。二〇一五年度下半期の芥川賞受賞作の、本谷有希子の『異類婚姻譚』（『群像』、二〇一五・一一）は、その問題が夫婦の話として語られた小説である。

物語は、ある日主人公の「私」は、自分が夫に似てきていることに気付く、気味悪く感じるところから始まる。「私」はこの日を境に夫婦の形について疑問を持ち始めるのだが、夫は体の具合を悪くし、其の後は揚げ物ばかりを食べるようになるなど、奇妙な出来事が続く。夫婦とは、二匹の蛇がお互いを呑み合う話のようなものなのか、あるいは鉢植えの鉢の土と根のようなのか、と主人公は思う。鉢の土と根の関係については、夫との関係だけではない。主人公はこうも思っている。「男たちは皆、土に染み込んだ養分のように、私の根を通して、深い

ところに入り込んできた。新しい誰かと付き合うたび、私は植え替えられ、以前の土の養分はすっかり消えた。それを証明するかのように、私は過去に付き合ってきた男たちと過ごした日々を、ほとんど思い出せない。また不思議なことに、私と付き合う男たちは皆、進んで私の土になりたがった」と。

さらに、「私」はこのようにも思う。「相手の思考や、相手の趣味、相手の言動がいつのまにか自分のそれに取って代わり、もともとそういう自分であったかのように振る舞っていることに気付くたび、いつもぞっとした。やめようとしても、やめられない」と。互いを呑み込む蛇の話に関連しては、「今の私は何匹もの蛇に喰われ続けてきた蛇の亡霊のようなもので、旦那に呑み込まれる前から、本来の自分などつくに失っていたのだろう。だから私は、一緒に住む相手が旦那であろうが、旦那のようなものであろうが、それほど気にせずいられるのだろう」と語る。

そして、夫の方も自分自身ではなく妻の「私」になろうとして洗濯物を畳んだりする。それを見ていた「私」は、「私になるんじゃないくて、あなたはもつと、いいものになりなさいっ」「旦那はもう、人の形をしなくていいから、好きな形にならなさい」と言い、ついに、夫は「可憐」な「一輪の山芍薬」になっ

てしまい、「私」は、「これほど近くにいながら、毎日寝起きを共にしながら、私は彼が一輪の山芍薬になりたがっていたことなど、露も知らなかった」、と思う。

この小説は、その題目に「譚」という語が用いられているが、これは、やはり説話や昔話を連想させようとしていて、それらの話の中でもとりわけ変身譚の現代版だということを含意していると言えよう。注意されるのは、自分自身というものが確固とした存在ではなく、あやふやで曖昧な存在であって、他者が容易に自分の中に侵入して来るようなものとされていることである。やはり芥川賞受賞作の村田紗耶香『コンビニ人間』（二〇一六年度上半期）や今村夏子『むらさきのスカートの女』（二〇一九年度上半期）も、言わば固有の〈私〉というものはなく、他者の造ったマニュアル通りに行動するだけであつたり、他者を後追いするだけの人物が主人公であつた。私たち現代人は、すでにそのような存在になっているのかも知れない。セルフ・アイデンティティの崩壊と言うよりも、溶解と言うべきかも知れないが、ともかく自己喪失の在り方である。そして、そういう状態を危機や疎外と捉えたり感じたりすることさえ、すでに現代人はしないのかも知れない。『異類婚姻譚』は、そのような現代人のあり方を寓話的に描いた小説と言えよう。

このような自己のあり方を、固有の〈私〉というものに捉われる考え方からではなく、土地の歴史から捉え直してみるとどうであろうか、というテーマを語っているのが、二〇一九年度下半期の受賞となった、古川真人の『背高泡立草』(せいたかあわだちそう、「すばる」、二〇一九・一〇)である。次に、この小説の梗概を述べておきたい。

——福岡市のアパートで一人暮らしをしている会社勤めの木村奈美が、休日に奈美の母の実家である吉川家の納屋の草刈りをするために、長崎の島に向かうところから物語は始まる。なぜ草刈りをしなければいけないのかと尋ねる奈美に、母は「良いやないね」と言う。なおその理由を聞こうとする奈美に、母は、島では昔から家やその周辺はできるだけ整備して荒れたままにしないのが慣習であり、草もそのままにしたら隣家に迷惑が掛かるからと答える。そして、伯母や従姉とともに、母の車に乗って長崎に向かうと、長崎の港には母の兄である哲雄も来ていた。吉川家には「古か家」と「新しい方の家」の二つあったが、祖母が亡くなって以来、二つとも空き家になっていた。「新しい方の家」が立っている場所で、吉川家は以前酒屋を営んでいたが、戦時中に統制が厳しくなって廃業したようで、奈美は家のそういう歴史もこのときに聞く。そして、草刈りを無事終

えて一行は帰途につく。——

以上が、ほとんど起伏の無いこの物語の梗概なのだが、実はこの物語には、途中、エピソードとしてはかなりの分量で語られる話が幾つか挿まれている。たとえばそれらは、かつて長崎のこの島から「雄飛熱」にかられて蝦夷地に行った人の話であったり、戦後すぐに朝鮮半島の故郷に帰る途中で船が難破して、島の漁師に助けられた在日韓朝鮮の人の話や、そして鹿児島からカヌーに乗ってきた少年のことである。おそらくそれらの挿話が主筋の話とどこかで絡まってくるのだらうと予想しながら読み進めた読者にとっては、この小説は解りにくく、飲み込みにくい物語であろう。絡まって来ないからである。

芥川賞選考委員の中にも選評でそのことに触れている人もいる。たとえば奥泉光は、「読みにくさ」は魅力の源泉でもあったので、そこをむしろ徹底することを、壁を突破して欲しかったというのが正直なところだ」と述べている。難しさが中途半端に終わっているということであろうか。おそらく山田詠美の、「同じ場所に確実に存在する異なった時の流れを交錯させるのは、この作者の真骨頂だろう。今回は、そこに、さまざまナラマをはさみ込み厚みが出た」という選評と、吉田修一の(略)市井一家のファミリーストーリーと見せかけて、その土地自体

を物語る手腕は高く評価したいと思われた」という選評が、この小説の本質を捉えた、且つ肯定的な見方だと言える。つまり、エピソードや主筋に登場する人物に焦点を当てて読もうとすると、この小説は複雑で読みにくい物語に見えるが、そうではなくてこれは土地の物語なのだ、土地が主人公の物語なのだと思つて読むとそれなりに了解できる小説だ、ということである。

その土地には様々な草が生えていて、奈美は母に「今日刈った草つて、何種類くらいあつたの?」と聞くと、母親の美穂は少し考えるように唸つてから、「まずはほら、まず魚腥草^{ドクダミ}、芝、それから、たしか虎杖^{イタドリ}も生えとつたじゃろ? それに……」と語り、続いて「これ? 背高泡立草。ほら、横の道に幾らでも生えとるやない。」と語る。

ここで、この小説の題目になっている草とその名前が登場するのである。「背高泡立草」はその土地を象徴する植物として登場している。奈美は、その名を「携帯電話」で検索する。知らない名前だったからである。ただ奈美が知らないのは、草の名前だけでなく、その土地に関わる歴史であり、その土地で演じられた物語や言わばその演者であつた人々のことも、である。おそらく、この奈美のあり方は実は私たちのあり方でもあるだろう。私たちも今いる土地のことや、その土地での出来事や人々

のことをほとんど知らないまま、生活しているのである。しかし、その土地に生きた様々な人々と様々な物語という、まさに重層的な歴史の堆積の上に、現在の私たちが生きているのであり、そのことをこの小説は気づかさせてくれる。そして、その重層的な歴史の中に生きた人々の代表として、先にも触れた、蝦夷地に行った人、在日韓国朝鮮の人たち、カヌーの少年の話が出てくるわけである。

そうなると、個人や〈私〉そのものに拘^{とら}わるのではなく、それらが言わば融解している土地の方にこそ、眼を向けるべきではないかということになってくる。このように『背高泡立草』は、自己というものは土地を通して辛うじて確かめることができる、ということ語つた物語とも言えるが、次に見たいのは記録や記憶によつて自分を含めての人々の来し方を知ろうとする物語である。二〇二二年度上半期の芥川賞作品の、高山羽根子の『首里の馬』(新潮、二〇二〇・三)である。

二

次に、『首里の馬』の梗概について簡単に述べておきたい。

——沖繩で暮らす若い女性である未名子は、「孤独な業務従事者への定期的な通信による精神的ケアと知性の共有」を目的

として、オンライン通話で遠く世界の向こうの人たちと繋がる仕事をしている。また沖縄史を記録保存する郷土資料館の手伝いもしていて、この手伝いは未名子が中学生の頃から続けている作業だと語られている。郷土資料館は、順さんという年を取った女性の民俗学者が外国人居住者から買った鉄筋の建物で、順さんには途さんという娘がいた。順さんは全国をまわっていたが、最後の地として沖縄を選んだようなのだ。ある日、未名子の家の庭に沖縄の宮古馬（ナークー）が迷い込む。未名子はその馬に「ヒコーキ」と名前を付け、背中に乗るようになる。やがて、順さんは亡くなり、未名子は資料館のその存在の意味を考える。――

以上のような話で、これもあまり起伏感の無い物語である。「ヒコーキ」が突然やってきたので、これから劇的な展開があるのかとも思われるが、実はほとんど新しい展開は起きないのである。順さんには途さんという娘がいるのだから、以前は結婚していたはずだが、その相手のことは書かれていない。主人公の未名子に関わることも、不登校気味だった中学生の彼女は、父親によって沖縄県内の別の場所から首里近くの場所に連れられてきたようだが、そのことはさりと触れられているだけで、また母親のことも書かれていない。未名子とオンライン

で話をしている外国人、ギバノやヴァンダ、ポーラも孤独な一人暮らしをしているらしい。そのオンラインの仕事を管理している男性のカンベも一人暮らしのようで、未名子のところに突然現れた宮古馬（ナークー）も放れ馬なのである。

そう見てくると、とりわけ物語の中の人間関係を見てくると、孤独なもの同士の結びつきのあり方が語られた物語に思われてくる。静かに淡々として物語は進行していくが、これは近未来の人間関係の一つのあり方が提示されている小説というふうに受け止められる。孤独、孤立しているからこそ、濃密な関係はもはや望めず、淡い関係でしかないが、しかしそれでも結びつくこうとするべきだと、この小説は語っていると言える。そういう主張が沖縄の地を舞台に語られているのは、作者の中に、孤独でありながら世界とも繋がっている場所としては沖縄が相応しいという判断があつたからかも知れない。宮古馬（ナークー）は、その孤独の象徴だと考えられる。

それだけでなく、この小説は記憶すること、記録することの意味を問いかけてもいる。もちろんそれは、郷土資料館の存在と関わっていて、未名子は郷土資料館に関してこう思っている、「真実はその瞬間から過去のものになる。ただそれであつても、ある時点だけで真実だとされている事柄が、情報として必要に

なる日が来ないんだ方がいい切れるんだらう。そんなものが詰まった資料館だった」と。そして、激戦によって風景だけでなく地形さえ変わった沖繩戦のことが語られた後、「大きな悲しいできごとによって、この景色が変わってしまったて、みんなが元どおりにしたくても元の状態がまったくわからなくなったときに、この情報がみんなの指針になるかもしれない」と未名子と思う。「この情報」というのは、「資料館の中に在ったすべての情報」のことである。そして、「この資料がどれかの困難を救うかもしれないんだと、未名子は思った」と語られている。

この辺りは、もう物語の最後の方であるが、注意したいのは、この後の小説の最後の段落で次のように続けられていることだ。すなわち、「ただ未名子は、そんなことはないほうがいい、今まで自分の人生のうち結構な時間をかけて記録した情報、つまり自分の宝物が、ずっと役に立つことなく、世界の果てのいくつかの場所ですっとしたまま、古びて劣化し、穴だらけに消え去ってしまうことのほうが、ずっとすばらしいことに決まっている、とあたたかいヒコーキの上で揺すられながらかすかに笑った」と。資料は「指針になるかもしれない」が、しかしそのように資料館の資料が必要になってくるような事態はやってこない方が幸せでいいことなんだ、と未名子は思うのである。

そういう思いが湧くのも、この思いのすぐ前のところで語られている沖繩戦のことがあるからであろう。

さて、『背高泡立草』は自分と深く関わるころの土地の歴史を通して自分の立ち位置を確かめる話として、また『首里の馬』は記録や記憶によって自分を含めての人々の来し方を知ろうとする話と読める。そうすると、二作品とも実は自分とは何かを、土地の歴史や記録によってしか知ることができなくなっている人たちの物語とも言える。前述したように、以前、若い人には〈自分探し〉という課題があり、若者は自分とは何かを探っている、ということが言われた。その頃には〈セルフ・アイデンティティー〉すなわち自己同一性、あるいは自分が自分である所以のものがあるはずで、それは自分の内面を掘り下げることで探り当てることができる、というふうに思われていた。今日においては、もはや自分を掘り下げてもそういうものはないので、それよりも自分と深く関わる土地の歴史を調べたり、記録された資料を通じてのみ、わかるかも知れないものとして意識されるようになったと言えようか。この二作からは、現代はそういう時代かも知れないと思われてくる。

もちろん、自己を土地や記録といった絡め手によって探ろうとしたりするのではなく、もはや自己とは何かなどという、

七面倒臭い問いかけなどはせず、自分の欲求や願いを言わば即目的に肯定している若者の主人公が登場するのが、同じく二〇二〇年度上半期に受賞したもう一作、遠野遥の『破局』（『文藝』、二〇二〇夏季号）である。

三

『破局』についても、簡単に梗概を述べておきたい。

——公務員試験の準備をしている大学四年の陽介が主人公である。陽介は交際中の麻衣子^{まいこ}としっくりいつていない。麻衣子は政治家志望で同じ大学に通う大学生である。陽介はOBとして母校の高校のラグビーのコーチもしていて、日々の肉体の鍛錬も怠らない。ストイックなところのある生活をしているわけだが、異性に関しては必ずしもそうではない。陽介は、お笑いのライブに誘われ、そこでやはり同じ大学の一年の灯^{あかり}と出会い、二人の仲は段々と進み、やがて灯の部屋を訪れて、彼女と肌を重ねるのである。それで灯は性に目覚め、むしろ彼女の方から積極的に陽介を求め出す。そして陽介は麻衣子とは別れるのである。しかし、しばらくして終電に間に合わなかったという麻衣子が、陽介のところに来て、泊めてくれと言い、二人の肉体の関係は復活する。やがて、そのことが灯に知られることにな

り、路上でつかみ合いの痴話喧嘩が始まり、それを止めようとした見ず知らずの男性に、陽介が暴行を働き、警察沙汰になってしまう。——

以上のような物語だが、芥川賞の選評では吉田修一の、「個人的には本作を『若い依存症患者たちの物語』として読みました。いろいろな依存が出てくるなか、主人公が抱えた「常識・マナー依存」が一番恐ろしい」という発言に頷ける。小川洋子は選評で主人公の「正しさへの執着」と言っているが、「正しさ」というよりも「常識」や単なる通念と言うべきであろう。島田雅彦は、「ラガーマンがストーカーやファシスト、ゾンビ、自衛警察になったら、という設定で読むと、不愉快極まりない。おそらくこの不愉快な読後感は、無知と歪んだ正義感と過剰な体力でスクラムを組まれたら、絶対押し切られるという不安とセットになっている」と述べている。これも頷ける選評である。また、奥泉光は選評で、「主人公は『欠落』を抱える人間である。だからこそかれは世間の通念に過剰に従おうとするので、そのアイロニーが笑いを生んで面白い。」と述べている。私はあまり笑えなかったが、奥泉光が述べているように、たしかに主人公は「世間の通念に過剰に従おう」としている。それが、いいことなのか否かという判断抜きで、とにかく「常識」「通念」「マ

ナー」に従うのを良しとして疑うことを知らないのである。

主人公の陽介がいかに「通念」や「常識」「マナー」に従順であるかというこの例を見てみたい。なお、この小説は陽介の一人称小説で、語り手は陽介である。最初の頃、灯の話は陽介にはとくに面白かったのではなかったが、「私は少し笑った」とされ、「こちらが笑うのを期待しているような話しぶりだったから、笑うのが礼儀だと思った。」とある。また、酒の飲める店に誘おうと思ったのだが、灯の年齢を聞いて十八歳なので、陽介は誘うことを止める。こう語られている、「灯の体と思えば酒を飲ませるわけにはいかないし、何より法律で禁止されていた」と。灯が未成年だったことを思い出し、「ひとりだけ酒を飲むのはマナーに反するので、私はアイスコーヒーを頼んだ」と。

まさに、奥泉光が言っているように、陽介は「世間の通念に過剰に従おう」としている。公務員試験のために彼は準備の勉強をしているのだが、そもそも何故公務員なのか、という問いかけすら無いまま、公務員試験を受けることを選んだと考えられる。というのも、かなり真面目に勉強をしているようなのだが、その公務員志望の動機について小説の中で触れることすらされていない。その動機については、生活が安定しているとか、

世間体が良いとか、陽介にも様々な理由があることはあるだろうが、そういう問題にほとんど眼を向けないというのは、実はその動機について一度も深く考えたことがなく、〈公務員はいいよ〉という世間の職業通念に単に従ったからであろう。たしかに、そういう若者がいて、それなりにキャンパスライフもエンジョイしていて、エリート然とした顔をしているとすれば、島田雅彦の言うように、「不愉快極まりない」であろう。

職業選択のことだけでなく、恋愛においても主人公は深く考えることがないまま、二人の女性と付き合っているのである。恋愛について哲学的に思索しろとは言わないが、少なくともその恋愛は自分にとって何なのか、一人の女性と縊^よりが戻って結局二人の女性と付き合うようになったことについて、それでいいのかという自省があつて当然だろう。しかし主人公には自らを省みるという内省、自省ということが全く欠落しているのだ。奥泉光の言う、「主人公は「欠落」を抱える人間である」という場合の「欠落」について具体的に述べられていないのでその中味はわからないが、内省が無いというのも陽介の大きな「欠落」の一つであろう。そういう人物を主人公にして彼の一人称小説にしたのは、作者の上手い戦略だったとも言える。もしも三人称小説ならば、地の文で語り手の批判的なコメントも要求

されるかも知れないが、一人称小説ならば、そのような面倒なコメントは差し挟む必要はなく、主人公の手前勝手な思いと彼の語りで話を進められるからである。

もつとも、作者は主人公を最後に「破局」に向かわせているわけだから、作者も主人公のあり方を肯定しているのではないであろう。警察沙汰になるようなことをしてかしては公務員になれないであろうから。ただ、その「破局」を小説のように偶発的な出来事からの「破局」にするのではなく、内省心が欠如した陽介のあり方から必然的に導き出される「破局」にするべきだったと思われる。主人公のあり方について、作者自身にも深い洞察は無いのではないかと推察される。作者のことはともかくとして、陽介のような若者が現代の若者の一つの典型かも知れない。以前ならば、若者というのは、まず批判的な存在であった。批判は既成の価値観や社会や大人たちの考え方に対してであった。それが今や、若者の多くは社会の通念や常識に唯々諾々として従う存在になっているのであろう。

このように、私たちは『破局』の小説から現代の若者の一つの姿を見ることができているのが、強調したいのは、社会通念や大人たちの価値観に対して批判精神が欠如しているだけでなく、自らのあり方に対しても批判的な意識がほぼ皆無と言っている

ことである。あるいは、先にも触れたが自らへの懷疑精神の欠如とも言える。自らに対して、何故そうなのか、という問いかけが全く無いのである。懷疑したり批判したりすることは、〈カッコワルイ〉と思っているのかも知れない。もちろん、そうなると現体制に反抗するなどということは、とてつもなく〈ださい〉ということになるだろう。そして、当人は公務員となつて安定した生活を送る、というわけである。そういう若者は、政治や社会の問題に対して全くの無反応な大人になつていくだろう。果たして、それでいいのだろうか。

四

『破局』ほど、主人公における批判精神や懷疑精神の欠如が露骨に現れ出ているのではないが、やはり同傾向の精神が見られるのが、二〇二〇年度下半期に受賞した、宇佐見りんの『推し、燃ゆ』(初出「文藝」二〇二〇年秋季号)である。このとき、作者の宇佐見りんは二一歳であった。『破局』の遠野遥は受賞時に二九歳だったので、ともに若い作家の受賞であり、『破局』の主人公は大学生だったが、『推し、燃ゆ』の主人公は高校生であり、このことは作者たちが主人公をほぼ同世代感覚で描くことができたということである。それは、先ほど述べた、主

人公に対して作者が批判的な距離が取れないという問題とも関わってくる。しかし、逆に言えば、主人公たちの言わば生態を主人公の視点から十全に描くことができたとも言える。『推し、燃ゆ』も、『破局』と同じく、主人公の視点から主人公による一人称の語りで物語は進んで行く。

「推し」というのは若者言葉で、他の人に薦めることを意味し、すなわち（推薦の推）であり、また、人に薦めたいほど気に入っている人や物のことを意味する場合もある。アイドルグループの中で最も応援しているメンバーを意味する語である「推しメン」という言葉が流行したことから、多くの場合、アイドルや俳優などに関して遣う言葉のようである。物語の初めは主人公の「あかり」が高校二年の初め頃である。「あかり」は以前よりアイドルの上野真幸を「推し」ていて、彼がファンを殴ったというニュースが流れても、彼を「推し」続けようとする。成績不良でこのままだと留年することがわかったとき、「あかり」は両親の同意のもと高校を中退する。そして、高校のときからしていた定食屋のアルバイトを続けながら、「あかり」は上野真幸や彼のファンと繋がることで、自分を支え、自分の居場所を確認できたと思うのである。

注意したいのは、「あかり」が上野真幸と個人的に仲良くな

りたいとは思っていないことで、そこがそれまでのアイドルファンと異なるところである。そして、なぜ上野真幸なのかという問いに対しては、「愚問だった。理由なんてあるはずがない。存在が好きだから、顔、踊り、歌、口調、性格、身のこなし、推しにまつわる諸々が好きになってくる。」と言う。そして、「新曲が出るたびに、オタクがいわゆる「祭壇」と呼ぶ棚にCDを飾る。」のである。これらからは、「推し」は一種の宗教的な存在でもあることがわかる。さらには、「全身全霊で打ち込めることが、あたしにもあるという事実を推しが教えてくれた。」と語っていて、「推し」の存在が「あかり」の人生にとって、すなわち彼女の生きる姿勢というものにとって、実に重要であるということがわかる。こう語られている、「とにかくあたしは身を削って注ぎ込むしかない、と思った。推すことはあたしの生きる手立てだった。業だった。」と。そして、「その存在をたしかに感じることで、あたしはあたし自身の存在を感じようとした。」とも。「推し」を推すことがあかりの存在理由のように、自身では思っているわけである。

このように見えてくると、昨今のいわゆる（追い掛け）のファンの心情も理解できないものと思われてくるが、先ほど、「推し」は「あかり」にとって宗教的な存在のようだと述べた

が、やはりそうであると言わざるを得ない。さらに注意したいのは、当人は気づいていないが、「推し」がいいと思つたのは、単に周りがそう思っていたから、というところも大いにあったと考えられるのだが、当人自身も作者もそのことをしつかりと認識しているとは考えられない。『破局』と同じく『推し、燃ゆ』においても、主人公の視点で主人公の語りで物語は展開して行くので、作者の批評的なコメントであろうと思われる事柄が地の文で語られることはない。もつとも、それは半面、作者の立場や姿勢が主人公の「あかり」に良く寄り添って物語を進めている、ということでもある。

今述べたことと関わるが、『破局』の主人公も、『推し、燃ゆ』の主人公も、公務員試験を受けようとすることにせよ、「推し」を推すことに生き甲斐を感じていることにせよ、本人たちは果たしてそれでいいのか、そういうあり方に問題はないのか、と自らを問うことをしないことを訝しく思わざるを得ない。もつとも、『推し、燃ゆ』の主人公の方は、「推す」ことが自分の存在を支えてくれることだからという自覚はあって、『破局』の主人公よりも高校生ながら内省的な人物ではある。しかしながら、『破局』の公務員試験にしろ、『推し、燃ゆ』のアイドルの追っかけにしろ、実は周囲の風潮に結局は乗らされているだけ

ではないのか、という印象が拭えない。あるいは、主人公たちの視野が狭く情報量も少なくて、他の世界を知る前に、公務員試験でも追っかけでも、たまたまそれに掴まってしまったのだと考えられる。そして自らその世界の狭さを省みることさえしない。おそらく作者も、主人公たちとはほぼ同程度の認識レベルにあると推察される。

これらの芥川賞作品は、社会に対して、また自身に対しても、批判的意識など無い若者たちの生態を描いた小説であったが、それとは反対の小説も受賞しているのである。

次に考えたいのは、二〇二一年度上半期受賞の李琴峰『彼岸花が咲く岸』（『文學界』、二〇二一・三）と二〇二一年度下半期受賞の砂川文次『ブラックボックス』（『群像』、二〇二一・八）である。

五

李琴峰の『彼岸花が咲く岸』について、選者の一人である奥泉光は選評で、「（略）戦争や排外主義を乗り越えた女性原理に基づく社会の提示は、いまなにより求められるべき思想の水脈につながっている。」と評価のコメントしているが、たしかにその点がこの小説について評価されるべきところだと言える。

物語は、琉球諸島の〈島〉に、記憶を失った一人の少女が流れて来たところから始まる。後に「宇美」と呼ばれるようになる、その少女を最初に見つけて助けたのが、〈島〉の娘の「遊娜」で、「宇美」は「遊娜」から〈島〉のことをいろいろと教わる。たとえば、〈島〉では血のつながりへの拘りがなく、生まれてきた子供は〈島〉の子供として育児経験豊富な島民が子どもを引き取って育てる。こう語られている、「(略)生まれてきた子供は〈島〉の子供として全ての学校の乳児部に預けられ、育児経験が豊富なノロが二歳まで育てることになっている。二歳になると〈島〉の成人から養育希望者を募る」、「家族制度やその前提となる婚姻制度もない。島民たちは性別に関係なく自由に恋愛し、女性妊娠したら産むかどうかは自分で選べる。子供が生まれたら学校に預け、〈島〉全体で育てる」と。出産を望まないならば、ノロに相談すれば特製の薬草で墮ろしてくれるようである。

ここで、ノロという言葉が出て来たが、これはもちろん沖繩のノロから取られたものである。沖繩のノロは、琉球神道に従事する、世襲の女性司祭者のことだが、この小説でもそういう意味合いを含みつつ、さらに重要な役目も担っている存在で、こう語られている、「ノロは全員女性で、〈島〉の指導者であり、

歴史の担い手であり、また各種祭礼の司祭でもある」と。〈島〉の政治や宗教などの指導するのはこのノロたちなのである。

ではなぜ、女性たちが指導するのかと言うと、男性たちが自分たちのしたことを反省し、指導の立場を退いたからである。昔、〈ニホン〉から追い出されてきた人たちがこの〈島〉に渡ってきたのだが、そのとき「男たちはこの〈島〉の元々の住人を皆殺しにし、屍体を海へ放り出した」のである。しかし、やがて男たちは、自分たちがしたことは自分たちを追いつ出した「〈ニホン〉の偉い人たち」と同じではないかと、その「おぞましさにハッとして」、指導者の地位から退いたとされている。〈ニホン〉とカタカナで書かれているのは、現実の日本のことではない、ということを表しているわけだが、〈ニホン〉という音は、現実の日本と重なって受け取られても良いことをやはり含意している。

たとえば、その「〈ニホン〉の偉い人たち」は「美しいニッポンを取り戻すための積極的な行動」と称して、「外人」をすべて「ニッポン」から追い出すことにしたと語られている。「美しいニッポンを取り戻す」云々は、〈未曾有〉を「みぞゆう」と読んで失笑を買った元財務相の人物と、仲のいい元総理が言ったことであるが、この元総理も「云々」を「でんでん」と

読み、〈思惑〉を「しわく」と読むような、基礎学力さえ無い人物だが、明らかに作者は「美しいニッポン」に関しては、その元総理の発言を意識している。

さて、小説に戻ると、このような〈島〉の歴史を「宇実」に語ったのは、「大ノロ」と言われている「ノロ」の中の最高指導者の老女だったが、彼女も実は「宇実」と同じく、若いときに他の土地から渡り着いたと言われている。このように、元はその土地の人間でなかった人物が最高指導者になっているところに、この〈島〉の優れたあり方があると言える。物語は「宇実」と「游娜」が「ノロ」になるための試験を受けて二人とも合格するところで終わっている。面白いのは、争いを起こしやすい男性は「ノロ」になる資格は無いとされているのだが、それはおかしいと考える「宇実」と「游娜」は、自分たちが「ノロ」になったら、そのあり方を変革しようと話し合うことである。おそらく、それは男性に対しての性差別だと、二人には思われたからであろう。

このようにこの小説では、排外主義的ではなく且つ女性原理に基づいた平和な社会が寓話的語られていて、たしかに奥泉光の選評にあったように、「理想の水脈につながっている」と思われ、それはまた現代日本社会に対する作者の反措定意識でも

ある。その意識は、先に見たように、彼ら〈島〉の住人を追い出した「ニホン」の偉い人たちが「美しいニッポンを取り戻す」云々を語ったところからも窺われる。にもかかわらず、芥川賞の選評者たちがその批判、反措定に言及していないのは、首を傾げざるを得ない。

最後に、二〇二一年度下半期に受賞した砂川文次『ブラックボックス』について触れておきたい。この小説は、格差社会の底辺で生きる人物を描き、選評には「現代のプロレタリア文学」だという評価もあったようである。他方では、古風なりアリズム小説で、技法的な新しさや冒険心には乏しいという意見も選考委員の中にあつたようである。しかし、とくに技法的な新しさは無くても、書かれるべき切実さがあつたのなら、それでいいではないかと思われる。選者が技法的な新しさに眼が向くのは、新しいものを良しとする特殊近代的な価値観に捕らわれていて、選者がそのことに無自覚なところの方が問題だと言えよう。それはともかく、物語は以下のような内容で、三人称客観小説の手法で展開していく。

——主人公の佐久間亮介は、自衛隊員や不動産営業などの職業を転々とした後、東京で自転車便専門の歩合制メッセンジャーとして働いている。三〇歳直前で同棲相手もいる主人公

はちゃんとしなくてはと思いつつも、感情が爆発して暴力沙汰を起こして刑務所に入ることになる。それは、税務署から来た二人の調査委員の一人が自分を笑ったように見え、暴力を振るったのだが、そのうちの一人が逃げて、それを追いつけているときに、二人の警官と遭遇し、その警官たちにも暴力を振るってしまったためである。結局、「傷害と暴行公務執行妨害と他の税金に関する諸々」のことで刑務所に入ることになる。小説の後半はその刑務所での生活が描かれていて、主人公はその中で、「自分はずっと遠くに行きたかった。今もそのように思っている」と思う。――

格差社会の中で生きる人たちを描いた受賞作としては、先にも触れた津村記久子の『ボトスライムの舟』があったが、『ブラックボックス』は格差社会の実態をオーソドックスなりアリズムの手法で描いたものである。主人公の、その爆発的な直情径行性はやはり芥川賞作家の西村賢太作品の主人公に通じるところがあり、そしてそれは特異なあり方と言えるが、しかし主人公の、「自分はずっと遠くに行きたかった」という思いは、私たちも共感できることがあると思われ、そういう思いを持つのもやはり疎外感があるからであろう。

この「疎外」という言葉は以前よく言われていたが、一時期

は死語となったような感があった。しかし、またリアリティのある言葉として復活しているようである。今、再び階級や格差が実感される社会に私たちは戻っている。二〇世紀の終わり頃、とりわけポストモダンということが言われていた頃は、階級とか社会主義という考え方は、もう古いのだという風潮があった。私はそのときから、資本主義が続く限りそれらの考え方は古びない、と思っていたが、残念なことに私の予感はお当たり、社会の格差が広がったのである。

もっとも、近代の日本は明治以降ずっと格差社会だったのである。社会学者がそれを統計的に明らかにしている。ただ、高度成長時代には生活水準が全体に底上げとなり、いわゆる最貧困層が表面上は見えなくなり、一億総中流だということふうなことも言われた。しかし、そうした中でも貧富の差は歴然としてあり、格差社会であったことに変わりはないわけだが、その格差の事態がまさに浮き上がって見えてきたのが昨今と言える。

さて、自分のアイデンティティは土地や記録の伝承から辛うじて認識できる、それだけ現代人のアイデンティティはあやふやになっているということを思わせたのが、『背高泡立草』や『首里の馬』であった。また、若者も世間の通念や流行に従順に従うことで今を生きていることを感じさせたのが、『破局』

や『推し、燃ゆ』であった。おかしなナシヨナリズムに傾きがちな日本社会に反措定を突きつけ、且つ今後のありうべき社会のあり方を提示したのが『彼岸花が咲く島』であり、格差社会における新たなプロレタリアート小説とも言えるのが『ブラックボックス』であった。

本稿では紙数の関係から詳しく扱うことができなかったが、二〇一七年度下半期受賞作である若竹千佐子の『おらおらでひとりいぐも』は、七五歳になる一人暮らしの女性が主人公の話であるが、この女性は、田辺聖子の『姥ざかり』などに出てくる、痛快な老齢の女性である「歌子さん」を連想させるような、やはり痛快な老女が主人公である。この作品は高齢化社会にどう生きるべきかの示唆と勇気を与えてくれる小説である。作者は受賞時には六三歳であった。なお、「おらおらでひとりいぐも」という言葉は、宮沢賢治の詩「永訣の朝」での「とし子」の言葉から取られたのではないかと思われる。ただし、「永訣の朝」では「とし子」のこの言葉はローマ字表記になっている。

こうして見てくると、高齢化社会をどう生きるかという問題や、〈自分〉というものが曖昧になったり、またその〈自分〉は社会通念や既成の価値観に従順に従うだけの存在になっているあり方の問題、さらには新たなプロレタリアート文学が登場

しているように、現代は過酷な格差社会になっているなど、芥川賞作品から私たちは現代の様々な問題を読み取ることができ、芥川賞は時代をよく映していると言える。

〔付記〕 本稿は、二〇二一年一月と二〇二二年二月に「ふくやま文学館」で行った文学講座での講義内容を論文にまとめたものである。引用文献等の出典については本文中に明記した。なお芥川賞の選評は、当該受賞作が掲載されている「文藝春秋」に拠っている。

（あやめ ひろはる／本学名誉教授）

キーワード＝芥川賞・自己・現代